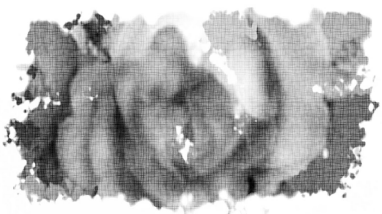


雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

葉 桜

小林 貴子



花冷や波畳まれて一日終へ
春の画布緑の絵具まだ置かず
遊ぶ声春とは足し算の季節
夏初め育てよ育て西之島
宙といふ光の器花は葉に
空のみの展ごる窓やリラ香る
父今も白樺派なり蝮の道
漆黒の牛曳き来り祭人
葵祭五風十雨のこの日ごろ
ひたひたと形代岸を打ちゐたり

麝香草

佐藤 映二

パラグライダー千曲川の春を遡る
堰の水どどど桂若葉かな
姨捨や星を宿して代搔田
山躑躅はにかむ賢治うしろに居
姨石や棚田に褪せて鯉幟
棚田守る人らよ伊吹麝香草

四季と折り合っ

佐藤 映二

季節は否応なしに巡ってくる。地球温暖化のせいで遅速はあっても、必ず、春夏秋冬は繰り返す。ところが、人生体験に〈再び〉はない。
小林貴子編集長は、初学時代のある日の体験をつぎのように吐露している。

大学三年の冬、布団にもぐり込んで冬の季語を、時候・天文・地理と書き写していると、寒さに凍えそうにな

ってきた。しかし、人事(生活)、つまり衣食住に関する季語を写す段になったら逆に、からだがぼかぼか温まってきた。―角川『俳句』(平成二十三年六月号)―
何を汲み取るかといえは、一度きりの人生の「コマ」を俳句にできるのは、季語の力のおかげだということ。同じ体験をいろんな季語で詠むこともでき、その都度、自分のどこかに潜む感覚に訴えた季語を選ぶようにせよ。しっかり肝に銘じよう。